

うなぎ文の構造

佐藤雄一

一 はじめに

いわゆる「うなぎ文」に関しては、これまでさまざまな角度から論じられてきたが、本稿では奥津敬一郎の「述語代用説」と北原保雄の「分裂文説」を中心に問題点を考察しつつ、うなぎ文の構造を明らかにしていくことにする。また、「AがBだ」という形式のうなぎ文、うなぎ文と非うなぎ文の区別についても論じていく。

二 従来の説と問題点

まずはじめに、奥津敬一郎の「述語代用説」を概観しておく。奥津は、

a・ボクハ ウナギ ダ

b・ボクハ ウナギ ヲ食ベル
c・ボクハ ウナギ ヲ釣ル

という用例から、「ダ」はいわば動詞の代用として、文の述部をなすのである」と述べている。「だ」はコンテキストからして動詞の意味内容が明らかである場合には動詞の位置に置かれ、動詞の代用をする。この「だ」の働きが「うなぎ文」を成立させているものであるとする考え方が「述語代用説」である。

この考え方に対してはさまざまな問題点が指摘されてきたが、次の二点に要約することができるだろう。

- 「ぼくはうなぎよ」「ぼくはうなぎさ」などの用例から、「よ・ね・さ」などの終助詞にも述語代用の働きを認めるのか。

- 「ぼくはうなぎ」という用例から、述語を代用している「だ」が省略されることに問題はないのか。

述語代用説に関しては、この二点について考察することにする。

次に、北原の分裂文説をみてみよう。^{（3）} 北原はうなぎ文の生成過程を次のように示している。

ぼくが 数学が できる。

← ぼくができるのは 数学だ。

← ぼくのは 数学だ。

← ぼくのは 数学だ。

← ぼくは 数学だ。

この変形に関してはつぎのような問題点がある。

・連体助詞「の」、準体助詞「の」による抽象化がどの程度可能であるのか。

・準体助詞「の」の省略に問題はないのか。

分裂文説に関してはこの二点について考察する。

三 述語代用説検証

「だ」の省略ということから考えてみよう。「だ」の働きは「事物」につきて極めて汎き形式の下に陳述をなすものにして、如何なる属性をも予定することなく殆ど一切の用言の基本的形式部分を代表せるもの。「種々の語について、全体が用言と同等の資格を得て、文節構成上用言と同様に用ゐられる」「体言を用言と対等ならしめる」ということである。

奥津はこのような「だ」の働きを「他の用言を代用し文の成立にとって必要な述語の働きをもつ」と解釈する。「他の用言を代用」している「だ」が省略されうるのかということを考えてみよう。

(1) a・アノ光ルノガ 阿武隈川

b・春ハ 曙

c・ボクハ ウナギ

(2) a・アノ光ルノガ 阿武隈川ダ

b・春ハ 曙ダ

c・ボクハ ウナギダ

(3) a・春ハ 曙ガ イイ

b・ボクハ ウナギヲ 食ベル

(1)の用例は(2)の表現から「ダ」が省略されたものである。述語を代用している「だ」が簡単に省略されてもよいのかという問題であるが、「だ」によって代用されること自体すでに用言の内容は自明のものとして理解されているということに基づいているはずである。自明のものとして理解されていないのであれば、さまざまな意味内容をもった用言が「だ」一語で抽象的に表現されることはないはずである。すでに自明のこととして扱われている用言の意味内容を代用している「だ」が省略されたとしても、それほど問題はないであろう。具体的な用言↓「だ」による抽象化↓「だ」の省略という流れはそれほど不自然ではないだろう。

次に示す用例のように、連体修飾構造においても「A体言＋格助詞＋用言＋B体言」↓「A体言＋の＋B体言」「(の)」による抽象化)↓「A体言B体言」「(の)の省略」という過程で説

明でできる用例がある。

バスで行く旅行↓バスでの旅行↓

バスの旅行↓バス旅行

歌を詠む会↓歌の会↓歌会

このことと並行的に考えれば、自明の関係として抽象化された表現においては、抽象化を担っているもの（「の」や「だ」）の省略も可能であるということが言えるのではないだろうか。

以上のことから、述語代用説で問題となった「だ」の省略ということに関しては解決されたことになる。

しかし、依然として「だ」に述語代用の働きがあるのかどうかという問題は残る。先の用例で考えてみよう。（１）は、（２）から「だ」が省略されたものであると考えることもできるが、

（３）から述語が省略されたものであると考えることもできるのである。この点に関して奥津は「述語の消去、「ダ」の消去のいずれも認めなければならぬと思う」と述べている。述語の消去を認めた場合、（２）の用例も、述語が消去されたあとで文を成立させるための「だ」が付け加えられたものとも考えることも可能になる。述語が省略されたあとに「陳述」を表わす「だ」が付け加えられたと考えるなら、その「だ」が代用しているものは何もないということになる。代用される述語はすでに省略されているのであるから。

「だ」が述語を代用していると考えるのであれば、それは述語の実質的な概念の部分ではなく、述語が文を成立させているところの「陳述」の部分だけであると考えるべきではないだろうか。述語の持つ実質的な概念の部分はすでに自明のこととして

理解され、省略されていると考えることが可能なのであるから、「だ」が述語を代用していると考ええる積極的な理由はなくなる。

さらに、述語が省略されたあとに「だ」が下接すると考えれば、終助詞の問題も解決される。「彼はうなぎね」「ぼくはうなぎさ」「私はうなぎよ」などの用例は、述語が省略されたあとに話し手の何らかの気持を表わす終助詞が付け加えられたと考えれば、終助詞の述語代用などは考える必要がなくなるのである。「だ」は述語を代用しているのではなく、文を成立させるところの「陳述」の働きを形式的に明示しているだけなのである。この考え方に基いて、次に、分裂文説について検討を加えることにする。

三 分裂文説検証

分裂文においては、「格助詞＋用言」が連体助詞「の」によって抽象化されるという変形（ぼくができるの↓ぼくのの）が行なわれていたが、この変形がどの程度可能であるのかを確かめてみよう。

① 彼が結婚する相手はジェニファードだ。

彼の相手はジェニファードだ。

彼のはジェニファードだ。

② ぼくがつくる料理はオムライスだ。

ぼくの料理はオムライスだ。

ぼくのはオムライスだ。

③ 彼が勤める会社は野村証券だ。

彼の会社は野村証券だ。

彼のは野村証券だ。

④ ぼくが生まれた国はマレーシアだ。

多くの国はマレーシアだ。

多くの国はマレーシアだ。

⑤ ぼくが担当する科目は数学だ。

多くの科目は数学だ。

多くの科目は数学だ。

⑥ 彼女が着ている服装はジーンズだ。

彼女の服装はジーンズだ。

彼女のはジーンズだ。

⑦ この仕事を仕上げる期限は今日中だ。

この仕事の期限は今日中だ。

この仕事のは今日中だ。

⑧ 息子が持っている本は『十五少年漂流記』だ。

息子の本は『十五少年漂流記』だ。

息子のは『十五少年漂流記』だ。

以上のように、用言の表す意味内容が助動詞を伴わず比較的単純な形態であって、なおかつA体言とB体言との関係が理解されやすいものであるならば、「格助詞＋用言」を「の」によって内包化させることができそうである。

しかし、次のように用言に助動詞が下接した場合には連体助詞「の」による内包化は難しくなる。

息子に読ませたい本は『十五少年漂流記』だ。

息子の本は『十五少年漂流記』だ。

うなぎ文がさまざまな助動詞をともなった用言を含む基底文からも生成されるのに対し「の」による内包が可能な表現が限られているということは、うなぎ文の生成過程において「の」による内包化を適用するということには無理があるということであろう。

また、「の」による内包化が可能な用例であっても、さらにその表現を抽象化し「の」を準体助詞化することが可能な用例は、さらに少なくなってくるようである。

先の用例で、明らかに「の」の準体助詞化が可能であると思われる用例は、

多くの料理はオムライスだ。 ↓

多くの料理はオムライスだ。

多くの科目は数学だ。 ↓

多くの科目は数学だ。

息子の本は『十五少年漂流記』だ。 ↓

息子のは『十五少年漂流記』だ。

の三例ぐらいであろう。その他の用例は、「の」を準体助詞化してしまうと不自然さが残る。

「の」がなぜ「格助詞＋用言」を内包できたかという点、A体言とB体言を結びつけている「格助詞＋用言」の意味内容が自明の事柄であったからである。自明の事柄でなければ、その了解度に応じて格助詞を表出させたり、用言を表出させたりして表現内容を具体化させるのである。A体言とB体言が格助詞や用言をはさまずに「の」で結ばれているということは、「の」が内包している「格助詞＋用言」の意味内容が（その言語場にお

いて）完全に了解されているということである。

さらに、B 体言が何であるかということが了解されていれば、「の」は準体助詞へと転化が可能となるのである。「A 体言＋格助詞＋用言＋B 体言」↓「A 体言＋の（準体助詞）」↓「A 体言＋の（連体助詞）＋B 体言」↓「A 体言＋の（準体助詞）」という流れは、抽象化される内容の自明度によるものである。「の」による内包化が不可能な用例からでも、うなぎ文が生成されるということは、分裂文説の変形過程に問題があるということであろう。理論的には可能であつても、実際の表現では例外となつてしまうものが多すぎるのである。さらに、準体助詞「の」が省略されてうなぎ文が生成されるということには、より大きな問題が残る。準体助詞の「の」は既に了解事項となつている事柄を表しているのであるから、省略されても問題はないようであるが、現実にはそうではない。先に述べた連体助詞「の」の省略とは事情が異なるのである。先の用例で考えてみよう。

1 ぼくの料理は オムライスだ。

← ぼくのは オムライスだ。

← ぼくは オムライスだ。

2 ぼくの科目は 数学だ。

← ぼくのは 数学だ。

← ぼくは 数学だ。

3 息子の本は 『十五少年漂流記』だ。

← 息子のは 『十五少年漂流記』だ。

← 息子は 『十五少年漂流記』だ。

やはり、「ぼくのは」↓「ぼくは」、「息子のは」↓「息子は」では大きく意味が違つてしまふのである。準体助詞「の」はその背景に具体的な体言を内包している。「ぼくのは」は「ぼくの料理は」、「ぼくの科目は」の意味であり、「息子のは」は「息子の本は」の意味である。「ぼくの料理」「ぼくの科目」「息子の本」という表現においては「料理」「科目」「本」という修飾されるものが表現内容の中心となる。「料理」「科目」「本」をより具体的に説明するために「ぼくのは」「息子のは」という修飾成分が上接されているのである。

したがって、「ぼくのは」「息子のは」という表現においては、「料理」「科目」「本」という具体的な概念を内包している準体助詞「の」のほうに表現の中心があるのである。ただ、自明の事柄であるから「の」によって内包されているだけであつて、表現内容としての重要性に変わりはない。表現内容の中心となつている「料理」を内包している「ぼくのは」「ぼくはの料理」の意と「ぼくは」、「科目」を内包している「ぼくのは」「ぼくはの科目」の意と「ぼくは」、「本」を内包している「息子のは」「息子のはの本」の意と「息子」とでは全く異なつた事柄を表しているということになるのである。

以上のことから、準体助詞「の」は自明の事柄を内包しつつ

も、その事柄は表現の中心を成すものであるために、準体助詞「の」が省略されることはないということになる。

ここまで述べてきたことをまとめておこう。分裂文説においては「A体言＋格助詞＋用言十の（体言）＋は＋B体言＋だ」という述語を倒置した構造からの変形を考える。連体助詞「の」は「A体言＋格助詞＋用言＋B体言」という表現構造における「格助詞＋用言」を内包化するという働きを持つ。理論的にはこの働きを分裂文の傍線部分に適用できそうであった。

しかし、連体助詞「の」が内包化しうる自明の関係よりも、うなぎ文に表現される体言と用言の関係のほうが複雑であるために、うなぎ文が生成される過程に「格助詞＋用言」という成分を含んでいても連体助詞「の」によって全てを内包化できるとは限らないのである。また、分裂文の「格助詞＋用言」が連体助詞「の」によって内包化されたとしても、この「の」が準体助詞に転化しうる用例は限られてくる。

さらに、「格助詞＋用言」を内包した連体助詞「の」が準体助詞に転化しえたとしても表現内容が異なってしまうことから準体助詞「の」を省略することは不可能であるということになる。

ここまで述べてきたことから、述語代用説、分裂文説ともに問題点を含んでおり、うなぎ文を説明するには不十分であることが明らかになった。そこで、次節では別の角度からうなぎ文を考察してみることにする。

四 うなぎ文の本質

言語の表現内容が正確に伝達されるためには、表現内容における論理的な関係が明確に理解されなければならない。「ぼくはうなぎだ」といううなぎ文がコミュニケーションのなかで正確に理解されるためには、「ぼく」と「うなぎ」との論理的関係が明確に理解されている必要がある。そこで、格関係（論理的関係）が明確にされている表現からの変形ということが考えられてきた。それが述語代用説や分裂文説であったわけである。しかし、ここまで述べてきたように、どちらの説にもそれぞれ問題点が残されていた。

うなぎ文がコミュニケーションのなかで正確に理解されるためには、どうしても前提のささえを抜きにしては考えられない。そこでこの前提との関わりという観点からうなぎ文を検討してみよう。

述語代用説では、うなぎ文が生成されるもとの表現は全て「AはB（が・を・に……）P（述語）」という形式になっている。これは「A」の部分に「は」によって取り立てられた表現になっている。「A」が取り立てられる以前の表現までさかのぼって考える必要があるのではないだろうか。前提が提示される背景には何らかの事象が存在する。その事象は全て格関係（論理的な関係）で示されるような客体的事象である。客体的な事象に対する問（前提）と答え（うなぎ文）という形式の中にうなぎ文は位置付けられるといえるだろう。「だろう」「らしい」と

いう助動詞は述語代用説において代用されず（ぼくはうなぎを食べるだろう→ぼくはうなぎだ）、分裂文説においても倒置されなかった（ぼくがうなぎを食べるだろう→ぼくが食べるだろうもののはうなぎだ）。「だろう」や「らしい」は客体的事象の中にもと存在するものではなく、客体的事象に基いた「答え」に対して話者自身の判断を付け加えるものなのである。以上のことから、「だろう」「らしい」はうなぎ文において、省略されることはなかったわけである。客体的な事象、前提、うなぎ文の三者の関係について例を用いて考えてみよう。

客体的事象

ぼくがうなぎを食べる。

前提

君は 何を食べるか。

（題目） （解説）

この表現は「君は」が題目として提示され、その「君」について述べるならば、「何を食べるか」という未知の要素（したがって、情報として求められる要素）「何」を伴う解説がなされるわけである。未知の情報（必要情報として求められている部分）に対する答えとしては「何」の部分だけを表現すれば、コミュニケーションは成立する。「うなぎ」という一語文だけで、最低限必要な情報は満たされるわけである。さらに、文として成立させるために必要な「陳述」を形式として明確に示せば「うなぎだ」という表現になる。前提にある空欄部分（情報として求められている部分）を埋めるだけで、その他の表現内容「ぼくが食べる」ということは前提に依存しているのである。

また、前提で題目として提示された「君は」の部分を繰り返し表現すれば、「ぼくはうなぎだ」といううなぎ文が生成されることになる。

さらに、「食べる」という既知の情報までを表現すれば、「ぼくはうなぎを食べる」という表現になる。

別の例でもう少し詳しく説明しよう。

客体的事象

昨日彼が銀座でうなぎを食べた。

前提とうなぎ文

1 昨日は 誰が銀座でうなぎを食べたか。

← 昨日は 彼だ。

2 彼は 昨日銀座で何を食べたか。

← 彼は うなぎだ。

3 銀座では いつ彼がうなぎを食べたか。

← 銀座では 昨日だ。

以上のように、前提において提示された題目の部分が繰り返しされて、うなぎ文が生成される。題目と必要な情報だけを提示し、「食べる」とその他の既知の情報（1では「うなぎを」、2では「銀座で」、3では「うなぎを」）も前提に依存し、省略されるのである。

次のような前提とうなぎ文の関係は成立しない。

1' 昨日は 誰が銀座でうなぎを食べたか。

← 彼は うなぎだ。

提示された題目と、それに関して求められている情報に対して空欄部分が適格に埋められていないために不自然になるのである。

前提で提示された題目にたいして必要最小限の情報を表現することによってうなぎ文は成立するのである。したがって、前提において題目が設定されない場合には「AはBだ」という形式の表現はされにくくなる。

← 4 昨日誰が銀座でうなぎを食べたか

彼だ。

← 5 昨日彼が銀座で何を食べたか。

うなぎだ。

← しかし、表現主体に何らかの意図がある場合には、表現主体が前提の中から題目を提示し「AはBだ」という形式を取ることも可能である。

← 4 昨日誰が銀座でうなぎを食べたか。

← 昨日は 彼だ。(今日はぼくだ)

銀座では彼だ。(新宿ではぼくだ)

うなぎは彼だ。(ステーキはぼくだ)

← 5 昨日彼が銀座で何を食べたか。

昨日はうなぎだ。(今日は刺身だ)

彼はうなぎだ※(ぼくは刺身だ)

銀座ではうなぎだ。(新宿では刺身だ)

以上のように、題目が設定されていない前提に対して、表現主体があえて題目を設定した場合には()内に示したような対立的事象が想起され、対比性を帯びたうなぎ文が生成される。題目が設定されていない前提に対する情報としては「彼だ」「うなぎだ」の部分だけで十分であるのに、敢えて「うは」と題目を設定することによってほかの要素が意識されるために対比性が生じるのであろう。5'では「ぼくはうなぎだ」といううなぎ文が生成されるが、これは(ぼくは刺身だ)という対立する事象は想起されにくいようである。「ぼくが食べるのはうなぎだ」という表現についても考えてみよう。

客体的事象

ぼくがうなぎを食べる。

前提

君は 何を食べるか

(題目) (解説)

この前提から「ぼくが食べるのはうなぎだ」という表現が生成されることは不自然な感もあるが、コミュニケーションとして成り立たないことはない。前提では「君は」と題目が設定されているのにたいして、「ぼくが食べるのは」を題目として取り立てることによって、題目に多少のずれが生じるために不自然な感じがあるが、「何を食べるのか」という表現で求められている情報にたいしては「うなぎだ」という表現で答えているた

めにコミュニケーションとしては成立するわけである。

また、前提としては「君は何を食べるか」という表現だけではなく、「君が食べるのは何か」という表現も考えられる。「君が食べるのは何か」という前提に対しては、「ぼくが食べるのはうなぎだ」という表現の他に、「ぼくはうなぎだ」という表現も考えられる。

客体的事象

ぼくがうなぎを食べる。

前提

君が食べるのは何か。

← ぼくが食べるのはうなぎだ。

ぼくはうなぎだ。

これは、

ぼく（が食べるの）はうなぎだ。

← （が食べるの）を変形・省略

← ぼくはうなぎだ

というように変形や省略がなされた結果「が食べるの」が消去されると考えるものではない。「ぼくが食べるのは」における「は」と「ぼくは」における「は」とは全く別のものとして考えるべきなのである。「ぼくが食べるのは」と「ぼくは」では題目として提示されている内容が全く異なる。前者は、前提の中で提示された題目を繰り返して提示しているのに対し、後者

は、前提で提示された題目の中から「ぼく」を題目として取り出して提示しているのである。

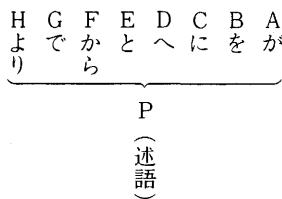
分裂文説において「ぼくのはうなぎだ」↓「ぼくはうなぎだ」という変形ができなかった理由もここにある。題目として提示されている内容が全く異なっているのである。

この両者の関係を見るなら、「ぼくが食べるのは」という題目からさらに「ぼく」の部分だけを題目として取り立てて提示しているのが「ぼくは」であると考えるべきではないだろうか。

ここまで述べてきたことから、うなぎ文とはどのようなものであるかということをもまとめておこう。

うなぎ文が成立する条件としては、言語的・非言語的なコンテキストが必要不可欠である。そして、その成立過程については次の通りである。

前提の背景となる客体的な事象は、格関係（論理的关系）によって次のように図式化できよう。

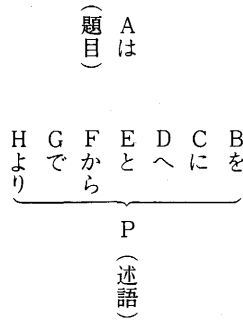


ここに示されたA～Hの格補充成分は任意の要素であって必

ず全てが必要であるというものではない。また、P（述語）には主体的な表現である「らしい」「だろう」「う・よう」は含まれない。

これら格助詞で示される客体的な事象の中から題目を設定し、前提を提示すれば次のようになる。

（「Aが」を題目として提示した場合）



BからHの全ての格補充成分についてこのような題目化の図式が成立しうる。そして、前提においては、解説の部分に未知の情報（求められる情報）が存在するのである。

（解説）

この題目——解説という構造の解説部分においてすでに自明の情報となっているP（述語）を省略し、既知の情報となっている格補充成分も省略し、B～Hの格補充成分の中から未知の情報（求められている情報）と題目のみを表現したものがうなぎ文である。そして、うなぎ文における「だ」はP（述語）を代用しているのではなく、文を成立させるための「陳述」を明示しているのである。

また、前提に関しては、次のように求められている情報が複

数の場合も考えられよう。

昨日はどこで何を食べたか。

←

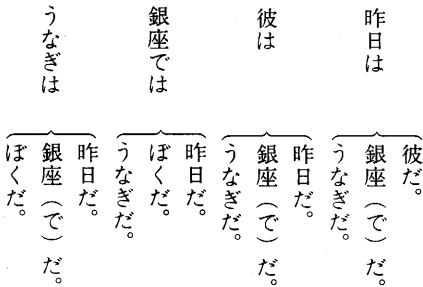
昨日は銀座でうなぎだ。

格関係で示される客体的事象から何を題目として提示し、提示された題目に関して何が求められている情報なのかということを表わすのが前提である。したがって、格関係で示される一つの客体的事象に対しては、前提によっていくつかのうなぎ文の生成が可能になるわけである。

例えば、

昨日彼が銀座でうなぎを食べた。

という客体的表現からは、題目と必要情報の組み合わせによって次のようなうなぎ文が生成可能になるわけである。



これまで論じられてきたうなぎ文は、格補充成分が二つだけというものが多かった。現実のコミュニケーションにおいても、題目と求める情報の二つの成分のみで、他の成分は省略された形で前提が提示される場合が多いであろう。そのほうがコミュニケーションとしては無駄がないのである。題目と未知の情報の二項目だけからなる用例が大部分を占めているということから、用言の消去ということに目が向けられていたわけである。奥津は、連用成分がいくつあってもうなぎ文は生成されるとして、

来年 福田サンハ 党大会デ モウ一度総裁ニ 選バレル

↓

来年 福田サンハ 党大会デ モウ一度総裁ダ

という例を上げているが、この述語代用説からは、

福田サンハモウ一度総裁ダ

福田サンハ総裁ダ

というように、前提から連用成分（格補充成分）も省略されているうなぎ文が生成される過程は説明できない。

また、分裂文説では三つ以上の格補充成分が存在する文からの変形は困難である。

福田さんが来年もう一度党大会で選ばれるの（役職）は総裁だ。

から「が来年もう一度党大会で選ばれるの」の部分の消去を説明するにはかなり煩雑な手続きが必要になりそうである。

しかし、消去されるものは用言だけではなく、求められている情報以外の格補充成分も消去可能であるというこの考え方に

立てば、より多くのうなぎ文に対してその生成過程の説明が可能なのではないだろうか。

そして、格助詞の性質と「は」の関係からA、Bの格補充成分が題目として提示された場合には格助詞が消去され、C、Hの格補充成分が題目として提示された場合には格助詞が表示される。（Cは格助詞の消去も可能である。）したがって、

今度の学会に ニューヨークからは 誰が 出席するか。

←

ニューヨークからは マイケルだ。

というよううなぎ文が生成可能になるわけである。

以上のように、うなぎ文は前提に依存した省略表現なのである。

五 「AがBだ」のうなぎ文

二つ以上の格補充成分を含む動詞文（述語が用言である文）から、題目と題目に関する必要な情報としての「名詞（+格助詞）」を明示し、既知の情報となる用言や、既知の情報となる他の格補充成分を省略することによってうなぎ文が生成されると考えるのであれば、「AはBだ」という形式だけではなく、「AがBだ」といううなぎ文が生成されることも当然考えられる。「AがBだ」という形のうなぎ文の生成過程は、述語代用説で考えれば、

ぼくがうなぎを食べる。

←

ぼくがうなぎだ。

というように、何の問題もなく説明される。

しかし、述語代用説そのものに問題があるし、仮に述語代用説で説明可能であったとしても「AがBだ」と「AはBだ」との表現性の違いまでは説明することはできないであろう。

また、北原は、「AはBだ」といううなぎ文が生成される以前の表現が「AがBだ」という考え方を示している。しかし、これら二つの表現は前提となる表現が異なっているため、一連の生成過程のなかに共存するのは不自然である。北原の説では、

ぼくが数学だ。

←

ぼくは数学だ。

となつてゐる。これを情報の既知、未知ということとで図示すると、

未知＋既知

←

既知＋未知

となる。未知の情報が既知の情報として扱われるということとは考えられないこともないが既知の情報であつたものが変形された結果未知の情報となつてしまふというのはおかしい。

以上のことから、「AがBだ」といううなぎ文は「AはBだ」が生成される以前の表現であると考えerのではなく、「AはBだ」とは別のものとして考える必要があるようである。

「AがBだ」型のうなぎ文を用例を検討しながら考えていこう。
客体的事象

ぼくがうなぎを食べる。

前提

誰がうなぎを食べるか。

←

ぼく。

ぼくだ。

ぼくがうなぎだ。

ぼくが食べる。

「誰」という求められている未知の情報に対する最低限の情報として「ぼく」というように、一語文で答えることも可能であるし、「陳述」を形式として明示し、「ぼくだ」という表現で答えることもあろう。ただし、「ぼくはうなぎだ」という表現はされない。「ぼく」は未知の情報として求められているものだからである。他の用例でも考えてみよう。

(1) a ぼくがうなぎだ。

b 和子が和服だ。

c 教頭が職員会議だ。

d 筆記試験が今日だ。

e クラーク君がニューヨークだ。

これらの表現の前提はそれぞれ次のように考えられる。

(2) a 誰がうなぎを食べるか。

b 誰が和服を着ているか。

c 誰が職員会議に出席するか。

d 何が今日行なわれるか。

e 誰がニューヨークから来たか。

このような前提にたいして、求められている情報「誰が」「何が」の部分に具体的な情報を入れ、既知の情報として必要ではなくなった用言を省略すれば、(1)の「AがBだ」型のうなぎ文ができる。

では、次のような用例はどうであろうか。

(3) a うなぎがばくだ。

b 和服が和子だ。

c 職員会議が教頭だ。

d 今日が筆記試験だ。

e ニューヨークがクラーク君だ。

これらの用例の前提は(2)のように単純ではない。(1)の用例では「うが」の部分にくるものは、背景となる客体的事象においても主格であるものであった。したがって、「誰が」「何が」の部分にそのまま埋め込めばよかったわけであるが、(3)の場合はそうはいかない。(3)の場合「うが」の部分にあるものは、背景となる客体的事象においては次のようにさまざまな格をとっているものなのである。

(4) a ばくがうなぎを食べる。

b 和子が和服を着ている。

c 教頭が職員会議に出席する。

d 筆記試験が今日行なわれる。

e クラーク君がニューヨークから来た。

では、(3)の表現はどのように説明されるのであろうか。さまざまな格関係で表現されているものを格助詞「が」が内包しているということは、格助詞の働きから考えてもありえない。

(3)の表現がなされる前提を考えてみよう。

(5) a (天ぶらはあなたですか)

天ぶらは彼で、うなぎがばくだ。

b (洋服は和子ですか)

洋服は洋子で、和服が和子だ。

c (PTAは教頭先生ですか)

PTAは校長で、職員会議が教頭だ。

d (明日は筆記試験ですか)

明日は口頭試験で、今日が筆記試験だ。

e (シカゴからはクラーク君ですか)

シカゴはジョージ君で、ニューヨークがクラーク君だ。

(一) 内の前提となる表現はうなぎ文でなくてもかまわない。前提のなかで示された二項目の事柄が既知の情報となり、「既知+未知(うはーで)、未知+既知(うがーだ)」という構造となっている。図式化して説明しよう。

前提

A (既) は B (未) ですか。

←

A (既) は C (未) で D (未) が B (既) だ。

前提で提示された「A」「B」はそれぞれ既知の情報となる。「A」

「B」それぞれについて新しい情報が述べられるわけであるから、

AはCで、BはDだ。

という形式で、次のように表現することも可能である。

(6) a (天ぶらはあなたですか)

天ぶらは彼で、ぼくはうなぎだ。

b (洋服は和子ですか)

洋服は洋子で、和子は和服だ。

c (PTAは教頭先生ですか)

PTAは校長で、教頭は職員会議だ。

d (明日は筆記試験ですか)

明日は口頭試験で、筆記試験は今日だ。

e (シカゴからはクラーク君ですか)

シカゴはジョージ君で、クラーク君はニューヨークだ。

(5) は同一語彙に属すると考えられるもの (a 「天ぶら・うなぎ」 「彼・ぼく」、b 「洋服・和服」 「洋子・和子」、c 「PTA・職員会議」 「校長・教頭」、d 「シカゴ・ニューヨーク」 「ジョージ君・クラーク君」) を並行的に並べた表現であるのに対し、(6) は「うはーだ」というように形式をそろえた表現であるということになる。

先にも述べたように、格助詞「が」が他の格を内包するということとは考えられないということ、そして、「AがBだ」という表現は「未知の情報+既知の情報」という構造になっているということから考えるなら、

(7) a ぼくはうなぎだ。

b 和子は和服だ。

c お父さんは会社だ。

d 筆記試験は今日だ。

e クラーク君はニューヨークだ。

という表現が倒置されてきたものが「AがBだ」といううなぎ文であると考えるべきではないだろうか。

(1) の用例についても同様に、次のような表現の倒置であると考えることができらるだろう。

(8) a (誰がうなぎを食べるか)

うなぎはぼくだ。

←

ぼくがうなぎだ。

b (誰が和服を着ているか)

和服は和子だ。

←

和子が和服だ。

c (誰が職員会議に出席するか)

職員会議は教頭だ。

←

教頭が職員会議だ。

d (何が今日行なわれるか)

今日は筆記試験だ。

←

筆記試験が今日だ。

e (誰がニューヨークから来たか)

ニューヨークからはクラーク君だ。

←

クラーク君がニューヨークからだ。

以上述べてきたことから、「AがBだ」という形式のうなぎ

文は、「AはBだ」といううなぎ文が「は」によって取り立てられる以前の表現なのではなく、「BはAだ」といううなぎ文が倒置された表現であるということになる。

六 うなぎ文と非うなぎ文の区別

次のような用例はこれまでうなぎ文とは見なされていなかった。

ぼくは佐藤だ。(命名文⁽¹⁾)

ソクラテスは人間だ。(所属文)

東京は日本の首都だ。(同一文)

「AはBだ」において「A $\cap$ B」という包摂関係にあるものは、これまでうなぎ文から除外されてきた。ここで、「AはBだ」における包摂関係について考えてみよう。包摂関係というものは「A $\cap$ B」と示されるようにBのほうが上位概念であり、Aのほうが下位概念にあるという関係である。これは、あくまで「A」という体言が持つ実質概念と「B」という体言が持つ実質概念から導き出される関係であって「は」が積極的に表示している関係ではない。「は」はあくまで「A」を題目として提示するだけであって論理的な関係(包摂関係も論理的な関係の一つと考えられよう)を示すものではないのである。したがって、特定の前提が設定されていない場合は(あるいは特定の前提が存在しないという前提においては)包摂関係にも解釈されるが、ある特定の前提においては全く異なった関係としても解釈されるのである。

君は誰に投票するか。

←
ぼくは佐藤に投票する。

←
ぼくは佐藤だ。

(フアーブルは昆虫を追究したが)

←
ソクラテスは何を追究したか。

←
ソクラテスは人間を追究した。

←
ソクラテスは人間だ。

というように、特定の場面を設定すれば包摂関係にはならないのである。

「AはBだ」という形式の文が、一般に「A $\cap$ B」という関係にあると考えられていたのは、包摂関係や、同一関係というものが全く前提が提示されていなくても(あるいは全く前提が提示されていないために)「A」という体言の持つ実質概念と「B」という体言の持つ実質概念との関係から導き出すことができるからではないだろうか。「AはBだ」における包摂関係や同一関係というのは前提に依存しなくても(あるいは前提が全く存在しないという前提において)理解できる関係であったのである。

包摂関係にあるものも、

私は佐藤という。

ソクラテスは人間に属する。

東京は日本の首都と定められている。

というように用言の復元が可能であるので、うなぎ文とみなすことができるのである。

このように考えるならば、「AはBだ」という形式を取る文には、同一文のように前提に対する依存度の低い表現から「ぼくはうなぎだ」のように前提に対する依存度の高いものまで、さまざまな表現が存在することになる。前提に対する依存度が低いということは省略されていると想定される述語が比較的限られているということであり、逆に、前提に対する依存度が高いということは省略されていると想定される述語がいろいろと考えられるということである。同一文は想定されうる述語が非常に限られている表現であるということになるのである。

以上のことから、「うなぎ文」という表現は「AはBだ」という形式をとる表現の中で特殊な表現として取り扱われるべきものではなく、前提への依存度という相対的な問題の中に存在するものなのである。用言を介して結ばれていた格補充成分が、前提によって自明となった仲介者である用言を省略し、題目・解説という形式で結びつけられたものをうなぎ文とすれば、「AはBだ」という形式は全てうなぎ文として位置付けることが可能なのである。

「AはBだ」という形式が全てうなぎ文として位置付けられるのであれば、「うなぎ文」という特定の文表現を設定する必要はなく、前提に対する依存度という程度の問題として考えていけばよいのではないだろうか。このように考えたほうが、論理的な関係は表わさない（したがって、包摂関係も同一関係も表わ

さない）という「は」の働きからの説明としても妥当であろう。

注

- 〈1〉奥津敬一郎『ボクハウナギダ』の文法「二〇ページ」。
- 〈2〉堀川昇「僕はうなぎだ」型の文について」（『実践国文学』第二四号 尾上圭介「ぼくはうなぎだ」の文はなぜ成り立つのか」（『国文学』一九八二年二月）などがある。
- 〈3〉ここでは、堀川の指摘を受けて、修正を加える以前の北原の説を取りあげた。
- 〈4〉山田孝雄『日本文法學概論』二七〇ページ。
- 〈5〉橋本進吉『国語法研究』七〇―七十一ページ。
- 〈6〉渡辺実『国語構文論』一二五ページ。
- 〈7〉奥津敬一郎『ボクハウナギダ』の文法「二二ページ」。
- 〈8〉奥津敬一郎『ボクハウナギダ』の文法「六七ページ」。
- 〈9〉「は」の対比性の問題に関しては、拙稿「は」の対比性」（『語文論叢』一九九号）参照。
- 〈10〉北原が堀川の指摘を受けたあとに修正を加えた分裂文説である。北原保雄『日本語文法の焦点』参照。
- 〈11〉「命名文」「所属文」「同一文」という用語は奥津の説から引用。

参考文献

内間 直仁

『沖縄言語と共同体』。

一九九〇年 社会評論社。

奥津敬一郎

『ボクハウナギダ』の文法。

一九七八年 くろしお出版。

尾上 圭介

「は」の係助詞性と表裏的機能」（『国語と国文

学」五八卷五号 一九八一年。

尾上 圭介 「象は鼻が長い」と「ぼくはうなぎだ」(『言語』一九八一年二月)。

「ぼくはうなぎだ」の文はなぜ成り立つのか」

尾上 圭介 (『国文学』一九八二年十二月)。

『日本語の世界6』。

北原 保雄 一九八一年 中央公論社。

『日本語文法の焦点』。

北原 保雄 一九八四年 教育出版。

『国語法研究』。

橋本 進吉 一九四八年 岩波書店。

「僕はうなぎだ」型の文について」(『実践国文学』第二四号)。

堀川 昇 一九三六年 宝文館。

『国語構文論』。

山田 孝雄 一九七二年 塙書房。

『国語構文論』。

渡辺 実 一九七二年 塙書房。

(千葉大学非常勤講師)